

---

# 異世界召喚モノ

rered

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界召喚モノ

### 【Zコード】

Z5482J

### 【作者名】

reread

### 【あらすじ】

いじめられっ子の竹下 吉雄は、本来ならば救世主として召喚されるはずだったが傍にいたイケメン表面優等生だが裏では弱者をいたぶる事を

喜びとする隆一を救世主と誤認した異世界の女神によつて2人ともに召喚されることになる。召還直後、女王、王女、騎士団長にも

隆一の方が救世主であると勘違いされ、吉雄は隆一の奴隸としてあつかわそうになり、思わず反抗した吉雄は救世主を侮辱した犯罪者

として

牢獄に繋がることになる。

「きもつ」

「うわコツチ見た」

「まじきしょいよね・・・死んでくれないかなwww」

「触られた・・・うう・・・気持ち悪い・・・」

白い目

罵倒

薄ら笑い

落書きされたノート、教科書

体育の授業ではボールのマト

放課後には取り囲まれて殴られカツ上げ

それが高校生、チビデブブサの三拍子揃つた  
竹下たけした 吉雄よしおの学校での日常。

小数の弱いものが虐げられ、助けを呼んでも、いじめている大数  
が「私たちがそんなことするわけないでしょ！」と外面を良くし  
て主張すれば、教師達は「あの子達がそんなことするわけがない！」  
と取り合ってはくれやしない。内気・醜い・背が低い。マイナス要  
素を持つものは、ストレス解消のオモチャとして精神的、肉体的に  
弄ばれるのだ。

放課後、オレンジ色の田<sup>た</sup>がたす教室の中

「IJの・・・糞野郎・・・」

殴<sup>う</sup>られて痛む脇腹を押さえながら、いじめ集団のリーダー、

隆<sup>じゅう</sup>一

藤原<sup>ふじわら</sup>

を涙の浮かんだ田<sup>た</sup>で睨んだ。

「豚<sup>ぶた</sup>が何言つてもわからんねーんだよwww」

「つざわい」

隆<sup>じゅう</sup>一に腹を蹴り上げられた僕はたまらず悲鳴をあげた。

端整な顔立ちにいかにもスポーツマン的な体型、成績優秀、スポーツ万能、生徒会長。

女子にファンクラブまである、まさに一見完璧人間の彼を教師は誰も疑おうとはしない。

「ははっ、まさに豚の悲鳴だなあ

誰も助けてはくれない、地獄のような毎日。しかし僕は自殺しようなんて考えてなかつた。

いつかコイツに復讐してやる・・・。この学校で良い子面して裏で弱者をオモチャにしている奴らに復讐してやるのだと今日も深く誓つた。

その時だった。

”つむ、かなり強い魔力反応じや。おお、見田麗しい強そうな男子があるわーこの強い反応は恐らく

この男子からじゃな！女神”ベリアース”の名の元において魔王から世界を救う者を召喚する！”

「じこからともなく女の声が響いてきたと思つた途端、隆一を中心として地面に奇妙な光の文様、魔法陣が浮かび上がった。

「う・・・うわああああ

その文様に吸い込まれるようにして消えていく隆一・・・。それで終わりかと思ひきや、この魔法陣の吸引力は収まらず、僕まで吸いこんできた。

「ぐわ・・・毎日毎日糞みたいな人生送つてんのに、なんで隆一のとばつちつなんかつけなきやなんね　ーんだよー！」

それが吉雄の、この世界での最後の叫びとなつた。

「おお、リュウジ様、彼が目を覚ましたよー。うう・・・改めて見てもなんとまあ・・・」

その忌々しそうな声が目を覚ました時に聞いた一声だつた。

周囲はさながら西洋の王宮。豪奢な真紅の絨毯に金銀の装飾がなされた柱や王座。天井に仕込まれた十字の天窓から入る白い日の光が更に莊厳さに拍車をかけていた。そこにいる王族・貴族的な人達が、僕を学校の生徒達と同じように気持ち悪そうな目で見ていた。

「こんな容姿ですけれど、彼は僕の友達なんです。」

リュウジはお得意の爽やかな笑みで、あたりを見回す。僕にはどす黒い笑みに見えて鳥肌がたつた。

「てめー、リュウジ！ 猫かぶつてんじやねーぞ！」

とあまりにも白々しい嘘に腹が立ち口からつい言葉がでてしまつ。

「貴様！ 異界の救世主様に向かつてなんといつ暴言を……」この聖アーティア王国騎士団長である私の能力値がこの大陸最高位のBランクなのにもかかわらず、能力値がすべてA+のリュウジ様に対して！ たとえ同じ異世界から来た者と言えど、このミネルヴァ容赦せんぞ！」

軍服を、そのはちきれんばかりの胸で押し上げ、赤髪をボーネルにしている女騎士が僕の首もとに剣をつきつける。

隆一はこの世界に救世主として召還されてきたらしい。能力値A+がどれくらいすごいのかは分からぬけれど、この女騎士の隆一への信奉ぶりから、すぐく高いのが分かった。

なんだ結局どこに来ても”ただしイケメンに限る”かよ。最悪だ。ミネルヴァさん、やめてください！ 彼は突然の事にきっと混乱しているのです！」

「まあ・・・さすが救世主様・・・」のよつな下賤の者に対しても優しいお言葉・・・

「このミリアリア、感動いたしました」

とロングの金髪が腰あたりまである王女のよつたな女が、リュウジをウツトリ見ながら賛同する。

「といひでこの下賤の者は、いかがいたしましょう、リュウジ様。

」

ミネルヴァがリュウジを見ながら頬を紅潮させながら質問した。

「うーむ、そつじやな・・・そのような//一オーケのような容姿にさきほどのような無礼な物言いをする者など口クな者ではあるまい。牢獄にでもいれておけばよいのではないか？」

と王様らしき人。

「そ・・・そなー・・・友達ですから、そんなことをされでは困ります・・・」

リュウジは困り顔をしながらも、一いちを見るときの目は明らかに笑っていた。

「リュウジ様が、そこまでおつしやるならリュウジ様の元で仕えさせても・・・」

こんな奴のもとで働くされるなんてとんでもないと思い、

「このクソ野郎の元でこきつかわれるくらいなら、とつとつ牢獄でもなんでも入れやがれッ！」

そう叫んだ途端、怒りで顔を真っ赤にしたミネルヴァに剣の柄で殴

られ、あまりの痛みに意識が遠のく。

薄れ行く意識の中、目の端にはリュウジの俺をバカにした笑みが移っていた。

はじめまして。

はじめて小説（こなつひるかな…）ひつわものを書かせていただきます。

異世界召喚チートと「ツトシフレ系」、皿田満小説となりますが、「指摘・」「感想」をこまつたら、どうぞよろしくお願ひいたします。

## 牢獄（前書き）

2話目です。  
文章を書くのが苦手なためおかしこじといふがまくまくでこまかね；  
難しいです。

”おこ…わと起きぬか、小僧！”

忌々しい異世界に来る原因となつた女の声が

僕が目を覚ました時に聞いた一声だつた。

薄暗く、湿つた空間。

背中から伝わる堅い感触、石の寝台。

“ついやら僕は本当に牢獄に入れられたみたいだつた。

ミネルヴァに殴られた頭の痛みと石の寝台で寝て痛む体の感触が夢ではないことを再認識させる。

”この救世を司る高位神！女神ベリアース様がこの陰気臭いところにわざわざ来てやつていろのだ！感謝せい！”

キンキンと響く少女のよつと田をやる。

艶やかな紫色の髪をツインテールにした、周囲に光のオーラをまと  
う強気そうな少女がめんどくさうに立つていた。

寝ながら話を聞くのは誰に対しても失礼であると思い、僕は起きあ  
がり寝台に座つた。

「それでお偉い神様が何が用ですか？ていうかはやく元の世界に

戻せよ。」

（元の世界も嫌いだけど、肉親と一緒に出来ないのは困る。）

”つむー、いまこの世界は闇の高位神の加護を受けた魔王とそれに従う魔族どもの侵攻によつて人間達が滅ぼされそうになつておるのじや。

そこで、Iの救世の女神たるIのワシが救世主を異世界から選び連れてくれるIになつたのじや。

しかし問題が起きての・・・。

そこへ一息つくと僕を憑々しがつて

”貴様のように醜い小僧が救世主だつたとは・・・小僧の力が膨大すぎ、またリュウジにもかなりの力があるから区別できずにリュウジを召還してしまつた所、気を利かせた魔法陣が本来、救世主になるべきだった小僧もひきずつて来てしまつたようなのじや”

「じゃあ隆一に魔王討伐任せ、僕は帰らせてくださ〜よ」

”いや、それはできん。魔王を倒さん限り戻れないし、能力値A+であつても、かの魔王には敵わぬのじ ゃ・・・。能力値が平均S以上でなければのう。小僧の横に判定機があるじやり? さつき寝ている間に調べさせてもらったのが、平均SSランクじやつた。ちなみに小僧に触れた汚らわしい判定機などいらんので返さなくてよいぞ!”

「それで僕はどうすれば、元の世界に返してもらえるんですか?」

僕は平静を保ちながら従順な態度で質問した。

”リュウジのために陰で魔族討伐を手伝うのじや！陰でコソコソ魔王討伐とは小僧、貴様の姿にピッタリの役目ではないか！ハハハ！”

「隆一様の手伝いをするためには、力の使い方が分からないと魔王討伐のお役に立てそうにもありません。どうか私に力の使い方と使える仕組みを教えていただけませんか？」

”もう・・・リュウジのためじやし仕方あるまい！よからう教えてやるが一度しかいわぬぞ”

女神はリュウジの事を考えたのか、可愛らしい顔を赤く染めた。

”あちらでは人間達の魔力を星から吸収することによって、神々が世界を運営しておるが、こちらの神々は吸収せんでも個々が強い魔力をもつておるのでな。吸収せずとも良いのじや。だからお主ら異世界人は世界を運営するための膨大な魔力を持つてこちらへ来るから、あの世界の者がこちらに来れば、誰でもこの世界の者よりも強いというわけじや。その中でもリュウジと不本意ながら小僧は飛び抜けた魔力量をもつていたというわけじやそして能力値とは筋力、魔力、耐久、幸運、敏捷のランクを平均で表した値じや。他にも固有の能力があつたりもするがのう”

怒りでこめかみを引きつらせながら更に僕は質問をしていく。

「隆一様は能力値A+のことですが、どの程度すごいのでじょか？」

” ランクには A～G まであつてな、一般的には農民じやと E、兵士は D～E、騎士は C～Dじやの。 B もあればこの世界では英雄クラスじや。 またまに A を超えた小僧のようないし以上奴もあるがの。

あとは・・・使い方じやな なあに、魔力が SSSSSS のお主が念じるだけで、この世界ではなんでも 可能じや！ SSSSSS など今まで見たこともないぞ・・・。 最高神すら凌いでおるかもしれんのう。

まあ説明はこれぐらいでよいな、小僧のようないい者とこれ以上話せば口が腐つてしまつわい。”

ある程度情報を聞き出した僕は、これ以上怒りを我慢する事ができなかつた。

「教えてくださいがとひいぞいます、女神様。」

” つむ！ それではワシの愛しいリュウジのために頑張るのじやぞ！”

「はは、『冗談を。 爆ぜて死ね、糞女！』

三日月のような形の笑いを浮かべた僕は怒りをこめて念じた。

” つづつ！ ……？？”

救世の女神は悲鳴すら上げることができないまま爆散しこの世界から消滅した。

「ふうー生まれて初めてスッキリした気分だ・・・」

ほがらかな気分になりながら僕は判定機の文字の浮かんだ透明な宝玉を見る。

能力値	SSSS	筋力B、魔力SSSS、耐久D、幸運F、敏捷S
-----	------	------------------------

対魔力	SS	狂化	F	*****	EX	*****	EX	*
***		EX						

称号：神殺し（補正で各数値が30%向上）

「・・・。これはひどい。」

あまりものチート性能に絶句する。

ミネルヴァに簡単に倒されたのはこの異様に低い耐久値のせいいかと納得しながら、

文字化けが3つもあることに、判定機が故障しているのではないかと一抹の不安を覚える。

「さて・・・これからどうするか・・・」

狭い牢獄の中で一人、堅い石の寝台の感触を羽毛ベットのようなふわふわの感触にし、

これから的事に思いをはせるのだった。

## 脱獄（前書き）

PV2-092アクセスありがとうございます！  
お気に入りも10件も入れていただいて・・・。  
感謝です！  
それでは第3話よければお読みください。

## 脱獄

僕は救世の女神・・・（名前なんだっけ）を爆殺した後、牢獄を破壊しながら抜け出た。

凶悪犯も収容されていたのかもしれないが、容姿だけで牢に入れるような王族どもだ。

言われない罪で入れられている者が沢山いるだろうし、糞王族が支配する王都の治安等知つたことではない。

「・・・・・・・・・・・・

そして僕は王宮へと歩を進めた。

「牢獄が破壊されて囚人が脱走しているぞーーー！」

鎧の金属音がガチャガチャと複数聞こえてくる。

僕はかまわず直進する。

広間にでると、高校の全校朝礼にいる人数、多分200人くらいの兵士達が集合していた。隊長らしき女が声をかけてきた

「む、なんだ貴様は！貴様のよつな子供が何故王宮に・・・なつ

なんと・・・この少年

かわいいではないか！」

「え”？” ×200（ヨシオ含む）

「え”？”とはなんだ！ブルドッグやパグ犬的な感じでかわいいではないか。」

（この世界にもブルドッグやパグ犬いるんだ・・・）

「君、ここから外は危ないからこいで待つてみなさいーーおい、そこ  
の2人、騒動が沈静化するまで  
ここの少年を守つていろーー」

そうついつて女隊長は牢獄のほうへと進んでいった。

「なんで俺達がこんな化け物みたいな奴を守らなきゃいけねーんだ  
よーーー。」

人間の言葉話すオーケーだろこいつ？」

「ひやはは、言えてる。ここの気持ち悪いのがかわいいとか隊長もど  
うかしてるよなー」

護衛として指定された2人の兵士が僕を見ながら会話をはじめる。  
僕を肉親以外で人間扱いしてくれた女隊長の部下達であったので、  
我慢した。

「すいません、お兄さん方ーーー  
「ん、なんだあ？おい気持ちわりいからこいつち見んな。床でも見て  
る。口も聞くんじゃねえ。」

女隊長の言葉が少し気の迷いを起しかせていたのだろう。やっぱり  
この姿勢でも自分について  
分かつてもらえれば仲良くなれるのではないか。勇気をだし  
て仲良くなるために話しかける。

「僕は人間です。竹下吉雄といいます。」

「ああ？豚が何かしゃべつてるぜ、ひやはは  
「だから黙つてろ、声も気持ち悪いーんだよ」

「そうですか。残念です。でも僕も決心が付きました、ありがとう

「Jぞ」しました。」

田に涙をにじませながら念じた。

「豚になれ」

「ブツ・・・ブヒヒ！？」

（あれ・・・なんで豚になつてゐるんだ！？）

「ブギイ！・・・ブヒイ！！」

（ヒイイ！・・・戻してくれえ！！）

「なら隆二が王宮のどこのにいるか教えていただけますか？」

「ブヒヒブーブヒヒー！！」

（救世主様なら東棟の最上階にいる！…）

「なるほど・・・東棟の最上階ですね、分かりました。 ありがとうございます

「Jぞ」います豚さん

「ブヒ！ブヒイブヒイ！」

（ほら！ 教えたんだだから元に戻してくれ！）

「ブヒイブヒイうつせーんだよ！ 豚の言葉なんて分かるわけねーだ  
ら、せいぜい豚人生楽しむんだな！」

遠のくつるせい豚供の鳴き声の中、更に奥へと進んだ。

豚供と別れた後、すぐに僕はリュウジとウリフタツの肉体へと組み替える。

「あいつと同じ顔とか虫睡走るけど・・・仕方ない」

「あ、リュウジ様！」のよくな所に…せや、そんそんお面ですので  
東棟に戻りましょう

僕を隆二と思つたメイドが話しかけてくる。

「うん、分かったよ。それじゃ あ案内してもらえるかな？」  
「はい、もちろんです！」このアリス・ルーテルンがご案内いたしました

頬を染めつつ とつしながら、僕の少し斜め前に寄つてくる。  
このアバズレが・・・。メイドの態度を見て悪寒とともに鳥肌がたつた。

隆一の部屋に向か이나がらメイドと話をする。

「ところで・・・リュウジ様？」

「なんですか、アリスさん。」

「次は・・・いつ呼んでいただけるのですか？」  
顔を真っ赤にし、モジモジしながら聞いてきた。

「なんのことですか？」

「もう・・・おとぼけになつて。いつともアリア姫様とミネルヴァ様がリュウジ様を

独占なさつて、私いつ夜に声をかけられるか、いつもいつも心待ちにしているのですよ！」

その話を聞いて背筋が寒くなつた。隆一はどじまで手を出しているんだらうか。城中の綺麗所

全員と関係持つてゐるんじゃないだらうな・・・。

「さあ、お部屋に着きましたよリュウジ様！」

扉を開けるアリス。

部屋の中のリュウジとニアリア姫、ミネルヴァが目を見開く。  
部屋の中の空気が何かおかしいと思つたアリスが中を見る。

「え・・・リュウジ様が・・・2人・・・？」

そして僕は不敵な笑みを浮かべながら隆一に囁く。

「よお・・・偽者さんよー。」

いきあたりばつたりで書き出したため、女神を殺したあと  
どう展開したらいいものか悩みまくりでしたw

1・隆一を放置してギルド登録

お尋ね者になつているから容姿変更。ただし力がかなり制限さ  
れて

元の姿に戻らなければ本来の力は発揮できない。

2・女神を殺した影響で自分の姿が女神と瓜二つに…TSもの。  
そして牢獄の隣の部屋にいたバー・コード頭のオッサンが実は  
聖アーティア王国の敵対国、ヴィルヘルム帝国の騎士様で、  
王国から抜け、帝国に行きその人の娘となり学生編スタート！  
3・そのまま王宮になぐりこむ。

の3ルートがありました。

1ルート・2ルートともに日和つた話になつていったので没にし、  
3ルート曰、王宮に殴りこみだゴルアになりました。  
しかし女つ氣のないのも味気ないかなあと思い、女隊長をつけたし  
てみました。

さてさて、本物の隆一君はどうなつてしまつのでしょうか！  
4話に続きます。

PVが・・・6000超えてるよおつかせん！

お氣に入りもこの件は……！

今回少し口租つてしまつた

お時間あればお付き合いくださいませ。

「よお・・・偽者さんよー！」

目を見開きながら、固まる隆一、王女、女騎士団長にメイド。  
「な・・・本物は俺だ！ どうせ魔族が俺に変装して来ているんだろ  
う。」

「むむむ・・・だが」いつもそつくりでは、どちらが本物のリュウジ  
様か区別がつかぬ・・・判定機もいつのまにかどこかに行っている  
し・・・」

「大丈夫ですよ、ミネルヴァ。 真実の女神様を召喚すれば一発です  
！ 魔族」ときが変装していても一発で解除できますわ。」

「さすがだな、ミリアリア！ よろしく頼む」

「ええ、リュウジ様のためにありつたけの魔力をこめてこの無礼者  
の正体を暴きますわ！」

ミリアリアの足元に魔方陣が展開されローリングのむらむらした金髪が  
ふわふわと揺れる。

「真実の女神”エイシア”我が招きにこたえよ！」 召喚

”なんじや・・・妾を呼んだのはお主か？ 聖アークティア王女ミリ  
アリアよ。

あの高慢ちきな奴の後釜を据えるまで、業務が溜まつてしまつて大  
変なのだぞ？”

ミリアリアの召還に応じて、シャギーの入った肩先までの焦げ茶色  
の髪、菊をあしらつたヘアピンで前髪をとめた少女が、腰に手をあ  
てながら出でてくる。

「申し訳ありません、エイシア様。 現在、救世主様の姿を模した不  
埒者が姿を現し、どちらが  
本物か判断がつきませんで・・・。 救世の女神様は最近お呼びして  
も出てこられませんし・・・。」

「ふむう・・・・・」

偉そうに隆一と僕を見やるエイシア。そして僕のどひひで皿をとめ、皿を見開く。

”え、ええ、ええまは・・・・”

震えだす女神様。

（分かるの？）

できるか分からぬが念話を送つてみる。

（わ・・・わかります・・・・）

ビビりまくっているのか話し方が変わつていた。

（解けないと思つけど、もし解いたら分かるよね？運命の女神（名前忘れた）と同じよう）

北斗神拳的な消滅をさせつてあげるから。悲鳴は”ひつ！…ひでぶつ！…”に決定

（ヒイツ、勘弁してください…そもそも私の魔力ランクじゃ貴方の構造組換を元に戻すことができんし、ベリアースちゃんみたいに死にたくないです…それにそれは女の子にさせる悲鳴じゃないです…・・・・）

（仕方ないなあ、それじゃあ”あわびゅ！…”にしてあげるよ。）

（・・・・それもいやです…・・・・）

「どうなさいたんですか、エイシア様？どこか調子でも悪いのですか？」

狼狽するエイシアを不審に思つたミコアリアがたずねる。

「む・・・なんでもないぞ。大丈夫じゃ。（ううう～、どうしたらいいのじゃあ…・・・）」

エイシアが困つていいよつなので彼女に対して僕は指示を出した。（どちらかが竹下吉雄が化けていい。しかしどちらが偽者かは分からぬが、2人を戦わせれば

分かるつて言って）

(むむ、それは良い案じゃのう。分かったぞ!)

「最近忙しくて調子が悪くてのう、どちらかが竹下吉雄に化けているのは分かるのじゃが、どちらが偽者かは分からぬのじゃ。しかし、救世主は魔王を倒すことができる唯一の者じゃ。とができる唯一の者じゃ。

2人を戦わせれば一目瞭然じゃう。

「なるほどーそれは名案ですね。リュウジ様であれば、あの醜い下賤の者など一瞬で倒されてしまつでしょー!」

「ええ、私もリュウジ様があの気味悪い生き物を駆除するお姿を見たいですわ!」

「そういう事なら仕方ないな・・・観客も呼んで皆に楽しんでもらわないとな!」

僕を晒し者にして楽しむつもりなんだろ。

「別に俺も構わないよ。沢山呼んできてくれ。」

そしてお前の恥ずかしい姿をたっぷり楽しんでもらうとい。

【救世の日 運命の刻】闘技場において救世主様による不埒な救世主を騙る偽救世主への断罪を行う。

観戦自由。我らの救世主の雄姿をじ覧あれ!  
聖アーヴィング・ミリアリア王

チラシが城下町に貼られ、ばら撒かれる。

『キヤーーー!リュウジ様』

『救世主様、がんばって!』

宣伝のため街中を周る隆一は街中の女達の声に手を振つてこたえていた。

背筋のゾッとする黄色い声を浴びるのが嫌だった僕はロープを田深に着、城下町の飲食店でメニューを眺めていた。

（おい、ヨシオ。おぬしが本当の救世主じゃろ？に何故こんなことになつたのじや？）

誰にも見えない状態で手乗り状態となつたエイシアが僕の肩に乗りながら問いかける。

（んー、僕の姿は元々チビでブタでブサイクで。一緒に隆一と召還されたんじや、僕は救世主には見えないでしょ？隆一も隆一で能力値がA+だつたから救世主だつて勘違いされたつてわけ。）

（ふむ・・・外見は確かに大事じやが、本質を見抜けないよつではのう・・・。）

あのベリアーセもどうせ外見にウツツを抜かして隆一を召還してきたんじやろ？女神失格じやな。）

（ところでエイシアさんは、どうして僕について来てるの？天界に帰れば？）

（うぐ・・・連れないので。・・・。本来は救世の女神がお主について回る予定だつたのじやが、最高神に後釜決まるまで変わりをせよと言われてな。お主の話相手・相談役をするから、よろしくじや。）  
（うげ・・・あんなのが着いて周る予定だつたのか。僕自身もそうだけど、紫ツインテも救世の女神として人選ミスだろ・・・。まあエイシアは僕の話聞いてくれるし良いかな。こちらこそ宜しくね。）

（ベリアーセの名前くらい覚えてやれ・・・まあ、あやつについては妾も同意見じやが、お主については別に人選ミスだとは思つてはおらんぞ？）

（・・・嬉しいこといつてくれるじやないの。）

（うつほ、いい救世主・・・つて妾に何を言わせるのじや おぬしは

！）

「おばやーん、」のベウフレテーつていうのください。」

「あいよーーそういうえーばお兄さんもリュウジ様を見に来た口かい？」

「・・・ソウデスヨー」

「あの方は本当に女の子達に人気でねえ。荒くれ者の男達が不満を言わないのが不思議なくらいだよ。」

「はい、ベウフレテーお待ちどうさま！」

「・・・ソウナンデスカー。ところで彼が着てから犯人が不明の犯罪とかは増加していませんか？」

「ああ、不思議なんだけどさ、救世主様が街にくるようになつてから犯人の分からない犯罪が増えてるみたいだねえ。女の子も時々いなくなつたりとかするみたいだし・・・。救世主様のイメージダウンをさせるために魔族が街の住人に化けてまぎれこんで、やつてるんじやないかつて噂だよ。今回の偽者の件もあるし、早く救世主様に魔王を討伐してもらいたいねえ。」

「ふーん。」

荒くれ者達を隆二がまとめて、犯罪行為をさせているんだろう。女の子がいなくなるのも隆二に寄つてきた女を食つた後、荒くれ者達にまわして・・・。相変わらず吐き氣のする野郎だ。

（エイシア、ベウフレテーの400リュネのリュネつてどういう単位なんだ？）

（まさかヨシオ・・・お主、無錢飲食か？ 1リュネが銅貨一枚、1万リュネが銀貨一枚、10万リュネが金貨一枚になつておる。）

（わかつた、ありがとう。この世界のお金召喚！）

空だつた布袋が一気に400リュネ分に膨らむ。

（え・・・えー？・・・セオリーとしてはギルドで働くのでは・・・

?とこりでどこから

召喚したんじや？）

（隆二の財布。）

「おこしかつたよ、おばあちゃん。おば、ここおこづかひな  
「ここよー、また来てねー！」

（ヒカル）ハイシタ、救世の日 運命の刻つてこひくなるの？）

（お主の世界で語つてこの明日の正午じやな。お主が負ける」と  
はなじゅひづが、まあがんばれ。）

（ああ、隆一に生き恥かかせてやるぜー）

（そ・・・そういう意味でこいつたのではなくこの辺が・・・）

いかがでしたでしょうか。

感想も2件もいただいていまして！

嬉しくて手がふるふる震えました。ありがとうございます！

主人公の理解役が欲しいと書かれていましたので  
追加してみましたがいかがでしたでしょうか。

次の5話で隆一との決着！！になるといいなあ  
といきあたりばつたりで書いてる作者でした。

## 貧困（前書き）

すいません！また寄り道してしまいました・・・。決戦はもう少し後に

なりそうです。申し訳ありません；

他の方の書いてる小説があまりにも楽しくて、私も何か書いてみた  
なという不純な動機で計画もなにもなく書き始めたこの小説ですが  
15000PV到達、お気に入り数66です！ありがとうございます！

すゝく

P・S 今回の冒頭の、空袋云々は前話の後半に少し書き足したもの  
です。

こういう事が時々あると思いますが生暖かい日で眺めてやってください！

「「へん、宿まで」」  
「あいつかなあ」

（ふむ、城でよいのではないか？あそこならふかふかの布団においしこり飯がタダでついてくるぞ？）

（隆一との決着がついたら住もうかな。今はこの街の観光をしてみたいんだ。）

（なるほど、異世界から来たお主には珍しい物も多かる。まあ妾はどいつもよいがのう。ベリアーセならふかふかの布団においしいご飯じやないと嫌じやあと駄々をこねておるだらつが・・・。）

街中を悩みながら歩いていると、ビビ、と体に軽い衝撃が来る。

「「めんねロープの人！」

「・・・。」

ぶつかってきたボサボサの髪に質素な服を来た少し痩せ氣味の子供が通り過ぎ裏通りに入つていく。

（エシオ、あの少女・・・。さつき食堂の外でお主をじっと見ていた子じやな。）

（うわ、クソ！財布がわりの袋盗まれた。幸運の数値がFランクなだけあるな・・・。）

（別に空の袋くらこ取られてもよいではないか。恐らくくらでもお金が出てくるマジックアイテムとでも思われたのじやうつな。）  
（んー、しかし聖とか国名の頭につくせにあんな子供がスリしてんのか・・・。気に食わないな。）

そう言つて僕はカメレオンのように体を周囲に擬態できるよう念じた。

(あの少女をつかむのか？お主の事じやからダンボールでつかむのかと思ったわ。)

(性欲をもてます。)

(お・・・おいまさかとは思つがもしやお主、ロココンか？)

(「冗談だよ。僕はガチホモだから。」)

(な・・・なんじやと・・・！)

そういうながら頬を染めながら自分の身を抱きしめるエイシア。  
(いや、お前女だろ？安心してくれ、僕は普通に女が好きだし、同じ位の年の子が好きだ。でもまあ相手にはされないけどね、あはは。)

(・・・・・)

頬を染めながら黙つたままのエイシアに、僕の顔は凍りつく。

(ま・・・まさか・・・？)

尋ねるのが恐ろしくなった僕はそのまま少女を追う。気まずい空気の中、あとをつけていた少女が建物の中へと入つていく。

(ん？あやつ、この建物に入つて言つたぞ・・・結構広いがぼろつちこのう。)

扉の前に立ちノックをする。

「すいませーん、少しお尋ねしたいことがあります。」

そして控えめにドアが開く。

「あの・・・返済のまゝもつ少し待つていただけないでしょうか。」

長い赤茶色の髪を後ろで束ねた少女がでてくる。貧弱なのか継ぎ毛は

ぎの多い服を着ているが

凛とした雰囲気をした子だった。

「僕は借金取りじゃありませんよ」

中を覗くと、沢山の子供達が僕を見ていた。その中で1人の子供が僕を見て小さく悲鳴を上げて机の下に隠れる。

（孤児院のようじやの・・・しかしこれほど貧乏とは・・・国は何も支援をしとらんのか？）

「僕の財布をスッていった子をつけていたらここに入つていいくのを見まして。今、机の下に入つた子なんですねど。」

「ま、ま、まあ！ それはすいません！ こら、リース出てきなさい。」

「エリカお姉ちゃん、財布つていうけどこれ元から空の袋だったもん！ リースそんなに悪くない！」

「そういう問題じゃありませんっ！ あれだけ悪い事するなつていつてるでしょう！」

「うう・・・うわああ～んわああんっ」

腕をひつぱられ、泣いているリースを見かねた僕は、2人の前に行こうとする。

すると目の前にいかにもガキ大将っぽい男の子が立ちふさがる。

「ま、待ってくれ！ 僕がリースに無理矢理させたんだ。殴るなら俺を殴れ！」

そういうながら僕を睨む。僕は手を少年のほうに伸ばし・・・

「ぐるなら来・・・ふえ？」

頭を撫でられながら素つ頓狂な声を上げる少年を見ながら頭を撫でる。

「お前、いい奴だなあ。僕の名前は・・・>リュウジ<sup>リュウジ</sup>っていうんだけど君の名前は?」

「>リュウジ<sup>リュウジ</sup>・・・?お城にいう救世主様と同じ名前だ! 僕はレイン。ところで、なんで俺を殴らないんだ?」

「確かに盗みは悪いことだけど、レインがカツ<sup>カツ</sup>所見させてくれたから許すよ。」

「う」と僕はレインに笑う。ローブを被っているからあまり表情は見えないだろうが、雰囲気は伝わったみたいだ。泣かせてしまったりースを抱きながらあやすエリカがこちらを見て申し訳なさそうに微笑む。

「あ・・・あの・・・お詫びに豪華なものはありませんが晩御飯一緒にいかがでしょうか?」

「ごめんなさいおにいちゃん、一緒に<sup>い</sup>飯たべよ?」

そういうながらリースが空袋を渡してくれる。

「>リュウジ<sup>リュウジ</sup>、今日は泊まつてけよ!」

「うん、そうしようかな。今日はここでお世話になるよ。」

その声をかわきりに子供達がわらわらと集まつてくる。  
なんか痛いぞ・・・。子供達が僕によじのぼりながら関節技をかけてくる。

「いたつ・・・痛い・・・痛いからー。」

(懐かれてしまつたよじやのつ・・・ふふふ)

(ちょ・・・笑い事じゃないから! 耐久Dの僕にはつらいです!! イタイイタイ! でも・・・こんなに他人と触れ合うなんて初めてだ

からさ・・・嬉しい。)

僕は目を潤ませながら苦笑する。

( い じ む い じ む )

そういうながら嬉しそうに微笑むエイシャ。

（でも、僕の元の姿を見たら嘘……）

目に溜まつた涙がこぼれて頬に伝う嬉しくて出た涙なのか悲しくて出た涙なのか僕にはよく分からなかつた。

『 い た だ き ま ー す ！ 』

「やつたあ今田せーつぱーあるやねー。」

「えへへ、」のスープお肉ある～」

8

一応想像はしていたが、ここまでとは思わなかつた僕は啞然とした。食卓には10cmくらいのフランスパンのようなものが1つに、小さい肉の欠片が1つ浮いたスープが浮かんでいる。

「あの・・・すいません、これが精一杯でして・・・」

エリカが僕の様子を見て、怒っていると思ったのだろうか謝つてくれる。

「ん・・・誤解をせで」あんね。別に君達に怒ってるわけじゃない

ポン！ポン！そんな音を立てながらテーブルに次々と料理がでてくる。

「わあー！見たことないような料理がいっぱいってきたよー

「ねえ、おにてーちゃんこれ食べていーの?」

「うん、遠慮せずに食べてね

めやつめやつと喜ぶ子供達。

「リ・・・^リコウジ^さん・・・これ・・・

目を見開きながらエリカが尋ねてくる。

「僕は魔法が得意でね。ちょっと料理を召喚してみたんだ。

「りょ・・・料理を召喚・・・?」

(もしや・・・隆二達の^飯か・・・?)

(イグザクトリー、その通りで^やります。)

「といひで^リコウジ^さん、その黒いローブ、^飯の時でも外せないんでしょうか。」

「顔にひどい火傷があつてね。あまり見せたくないんだ。」

「すいません、不躾な事を聞いてしまつて・・・。」

「いひつて、気にしないで!ほら早く食べよ!」

子供達のベッドの感触をフカフカに変えてから、僕も床につく。

「おやすみ、エイシヤ。また明日もよろしく頼むよ。」

「つむ、任せるがよい。おやすみヨシオ。」

子供達と遊んで疲れていたのか、すぐに睡魔が襲ってきた。

## 貧困（後書き）

感想も一気に4件もいただきまして・・・誠にありがとうございました！

話を膨らまさうとしてどんどん面白つていつてますが、面白いのか  
なあ・・・。どうなんだろう。よくわかんないなあ・・・。って感  
じで

疑心暗鬼になりながら書いてますので、いついたら面白こと感想つねじ  
感想ありましたら宜しくお願いしますーー！

## 憤怒（前書き）

R15的な感じです。

嫌悪感を感じる方は飛ばすのが苦かもしだせん。

前話が字数制限でひつかかってため分けております。

## 憤怒

“起きよー早く起きよーコシオ！”  
コサコサと揺すられ僕は目を覚ました。

「どうしたんだ？まだ暗いじゃないか。」

“さきほど男が一人来ての、その男と一緒にエリカが外にでていったんじや。気にならぬか？”

「…。追跡するぞ。」

しばらくすると、立派な屋敷の立ち並ぶ住宅街に2人は入っていく。

(ふむ…。貴族街か…。)

(…。)

「よし、ここの屋敷だ。」

「ほ…。本当に私が体を売れば孤児院の借金は帳消しにしてくれて、ミミル達にも会わせてくれるのね？」

「ああ、約束するぜ。ほら、早く入れ。」

(身売りとはなんともじこ…。)

(屋敷の中に入るぞエイシア。)

僕は周囲に擬態しながら2人にピタリとついていく。

一面に敷き詰められた赤い絨毯にシャンデリア。中央にある階段の手すりにもたれながら仮面をつけた男がこちらを見ていた。  
僕はその男の顔を見て歯ギシリをする。

「「」苦労様、ギース。こんにちわ、お嬢さん。」

カツン、カツン、と音を響かせ階段から下りてくる。  
(間違いない、あいは・・・隆一だ。)

隆一はエリカの前に立つと、彼女の顎を持ち上げる。

「ふむ・・・中々の上玉だな・・・。よし浴室へと連れて行け!  
「ま・・・待つて! その前に行方不明になつてた、ミミル達にあわ  
せてください。」

エリカの言葉に、隆一は楽しそうに微笑むと、指をパチンとならす。

ジャラ・・・ジャラ・・・

あられもない服に首輪をつけ上気した頬でリュウジを見つめる3人の女達が出てくる。

『お呼びでしょうかご主人様』

驚愕に目を見開くエリカ。

「な・・・なにしてるのよ・・・ミミル・・・クーリオ・・・メリ  
ル・・・。人攫いにさらわれた所を助けられてここで給仕をしてる  
んじゃ・・・。それにマリスはどこにいるの?」

「ええ・・・”給仕”よ? ふふ、貴方もご主人様のために私達と一緒に尽くしましょ?」

「とっても幸せなんだから・・・

「でもあんまり粗相をしきると、マリスみたいにギースさん達専用の玩具になつてしまつわよ?」

「ひ・・・ひい・・・・・・

行方不明となつたいた孤児院の友達の異様な変わりように怯え、あとずさるエリカを逃がすまいと羽交い絞めにするギース。

「君も僕のために頑張ってくれよ・・・ハハ・・・グエツ・・・」  
僕は我慢できずに隆一を殴つていた。一応手加減して殴つたが気絶で済んでいる所はさすが能力値A+。

「貴様！いつの間に！」

剣を抜き放ち、僕に飛び掛つてくるギース。魔力で体を強化し拳でそのまま剣を殴りぬけて破壊し、そのまま上半身を粉々に殴り吹き飛ばす。

「エリュウジくさん！」

エリカが涙を浮かべながら嬉しそうに僕を見る。

「エリカ、僕の手を握つて！逃げるよ。」「は・・・はい！でも//ミル達が・・・」

（・・・エイシャ。）

（安心せいヨシオ。本物のリュウジのほうは恐らく固有スキル魅了Sランクによる洗脳のようなものじゃ。これを解除すれば、元に戻るじやろう。別にお主がおそれているような大幅に記憶や感情を改竄するようなものではないから安心せい。）

そして僕は隆一によりそつう3人を眠らせ、残りの一人も救出し、孤児院へとつながるよう空間に穴を空けた。

「・・・怖かつたですぅ・・・ひぐつ・・・えぐつ・・・」

孤児院に戻ると、エリカが僕に抱きついてきた。生まれて初めて感

じた柔らかい感触に衝撃を覚える。

しかし、元の姿の僕であればエリカはきっと抱きつかせしないだろうし逆に嫌悪するだろ。エリカを引き離し、わざわざのエリカの記憶を封印し、いい夢を見ながら眠るように念じた。

「ぐう・・・ぐう・・・・・・むこち・・・・・・えへへ・・・・・・」

僕にもたれかかるように寝たエリカを持ち上げ、ベッドに寝かせた後、ミミル達の洗脳の解除、一部の記憶を消し僕も自分のベッドに戻る。

「ふう・・・疲れた・・・・・・明日は隆一との決戦かあ。」

（お疲れ様じや、エシオ。ゆっくり休むがいい。）（お疲れ様じや、おやすみ、ハイシア）（今度いやおやすみ、ハイシア）

そして夜が明ける。

**憤怒（後書き）**

そして次こそ決戦です！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5482j/>

---

異世界召喚モノ

2010年10月10日18時23分発行